

## 誰が今ルーマンを読む(べきな)のか？

北田 暁大

### 【1】

本書『意味の歴史社会学』の主題は、「①抽象的な理論家として知られるルーマンが歴史的な対象に取り組んでいるということだけではなく、②彼の理論自体がある歴史性をまもっていることを明らかに (p10)」するというもの。序章に記されたこのマニフェスト的な言葉のうちに、すでに本書を貫く鋭い問題意識が刻み込まれている。

①まず第一に、日本のルーマン受容のなかであまり重点を置かれることのなかったルーマンの歴史記述に着目していること。あらためて確認するまでもなく、ルーマンとともに「現代社会学のスター」とみなされるギデンズ、ハーバーマス、ブルデュー、フーコーなどの議論と比べてみても、ルーマン理論の抽象性、実証への応用の困難さは際立っている。「理論のための理論」などと揶揄されることも少なくない。高橋は、そうしたルーマン像を覆すべく、『情念としての愛』や『社会構造とゼマンティック』などで実践されたルーマンの歴史記述とその論理とを丁寧に解題していく。ルーマンの理論的側面にのみ目を向け（「理論のための理論」と揶揄し）ていた読者に対する啓蒙効果は、けっして小さくないだろう。フーコー的な前提をとった歴史社会学が流行している観もある現在、ルーマンを歴史社会学者として捉え返す高橋の試みは実にチャレンジングなものといえる。

②しかしいっそう重要なのは、高橋の仕事が、「ルーマンの歴史研究」の紹介に留まる

ことなく、「ルーマン理論の歴史的な性格」を剔出することを目指していることだ。ルーマンは、一般的な社会システムの応用 application としてたまたま歴史に触れたのではない、ルーマンの理論、とりわけそのゼマンティックをめぐる洞察は歴史へと結びつくある種の必然性を内包していた—高橋はそのように考える。

ルーマンが社会システムやコミュニケーションをめぐる基礎的研究のなかでゼマンティック（意味論）に大きな理論的位置を与えていたことはよく知られている。しかし、そのゼマンティック概念が、一定の具体性を備えた社会分化論、進化論のなかでどのような位置づけを与えられているのか、という点について十分な検討が加えられてきたとは言い難い。高橋は、ルーマンにおける研究の二つの軸（社会システム理論／知識社会学的研究）の連関を示しつつ (p12)、ゼマンティック概念が、一般的なコミュニケーションの成立を担保する理論装置であるだけでなく、それ自身歴史研究を駆動させるような、いわば「本質的」に歴史的な概念であることを説得的に論証している。「ルーマンは歴史《も》語った」ではなく、「ルーマンは歴史《を(こそ)》語っていた」とする斬新な解釈—ゼマンティック概念に照準しつつ、社会システム理論という理論が、歴史分析へと向かわざるをえない／向かうべき根拠・理由をつまびらかにしたこと—は、おそらくルーマン研究にとっても、理論を軽視しがちであった歴史社会学にとっても、新たな議論

の地平を切り開くものといえよう。

## 【2】

詳細なルーマン解釈の妥当性如何は私の手に負えるものではないから、「ルーマン学」としての評価はここでは控えさせていただく。ルーマンの理論と歴史社会学の双方に興味を持ちながら、両者の連関をつめて考えることのなかった一研究者として、以上のような高橋の研究には最大限の賛辞を送りたいと思う。第二章～五章の分析は、ルーマンの歴史研究、知識社会学の紹介にとどまることなく、つねに社会システム理論との連関を意識しつつ複層的に描かれており、「ルーマンのアンチョコ本」を期待して読み始めた読者をいい意味で裏切るものとなっている。「ルーマンを使って歴史分析でもしてみるか」という安直な発想を牽制し、ゼマンティックを分析するということの困難さをそのものとして取り出すこと、クニール＝ナセヒの著作とはまったく正反対の意味において、実に啓蒙的な書であると言うことができよう。

少なくとも、理論／歴史という二つの位相を断絶させてまま研究を進めてきた私にとって、『意味の歴史社会学』は、思考停止のまどろみから目覚めさせてくれるメディア＝媒体であった。高橋にとっては強引とも映るであろう解釈だと思うが、本書から私が勝手に受け取った“意味”をいくつか書き留めておきたい。

第一に、『意味の歴史社会学』は、ルーマンの著作に対する新たな「読みの姿勢」、すなわち、ルーマンの著作を、(1) 社会システム／コミュニケーションの一般理論が描かれたカノンとして読む（『社会システム理論』など）、あるいは、(2) 社会的事象にかんする知見の供給元として読む（『法社会学』『社会の法』など）、というのとは異なる、(3) 歴史学的作品として受け止める態度を涵養し

ていく必要を私たちに教えてくれる。

私見では、ルーマンという人は、卓越した理論家であると同時に、卓越した歴史解釈学者である。たとえば『社会の経済』におけるコード変容論や、『情念としての愛』の歴史記述、『社会構造とゼマンティック』におけるゼマンティック付値などを考えてみればよい。それは、ルーマンのゼマンティック概念やコード／プログラム概念を身につけていさえすれば、自動的に導出されるようなものではない。とてつもなく意外な「区別」を歴史のなかに見いだし、理論整合的な形で言語化する—その絶妙さはまさしく「職人業」といえる。その名人ぶりはレヴィ＝ストロースのそれとよく似ている。レヴィ＝ストロースの構造分析はたしかに、「形式的」には誰しも修得可能なものではあったが、具体的な二項対立抽出にかんしては誰もレヴィ＝ストロースを出し抜くことはできなかった。それと同じように、私たちはどれほど社会システム理論を身につけても、ルーマンの歴史記述に到達することはなかなかできない。ルーマンの区別措定の妙義を“作品”として味わいつつ、ルーマンを出し抜く機会を虎視眈々とうかがうこと—そうした「ルーマン読み」の可能性を私たちは否定してはならないだろう。『意味の歴史社会学』はそうした新たな「ルーマン読み」の可能性に踏み出した“作品”である、と私は考えている。

こうした「読み」の地平からすれば、「(歴史) 変動」というのは理論的な水準において「語られる」ものというよりは、むしろ区別を与える実践において「示される」べきものということになるだろう。理論において「変動」を語ることは案外たやすい。しかし、もっとも重要なことは、新たなゼマンティックの実定化が、以前のゼマンティックの何を解決／隠蔽したのかを詳細に分析しつつ、ゼマンティックの「断絶」を指し示していくことである。「断絶」を理論水準（のみ）で指

弾することは、結果的に理論そのものの静態化を招きいれてしまう。ルーマンが、動態／静態という区別を導入することなく自らの理論を彫塑し、淡々と歴史のなかに区別を与え続けていったのも、おそらくは、そうした「フォーマット化された静態性批判」を回避するためであった(と思う)。

もちろん、ルーマンが何の意識もなく無自覚なままにゼマンティック措定を行っていたというのではない。高橋が示唆するように、「ゼマンティックは、コミュニケーションをそもそも可能にするレヴェルの意味的な蓄積体を表すのではなく、むしろ、基本的なコミュニケーション可能性を基盤として、その上のレヴェルでコミュニケーションにおける不確実性を低減させる機能を果たすものである(p30)」。だから賭金は、ゼマンティックを「コミュニケーションをそもそも可能にするレヴェルの意味的な蓄積体」と捉えない形で、いかにして歴史を描くのか、という点に見いだされなくてはならない。ルーマンの歴史記述を支える理論的背景と、ゼマンティック解釈にさいしての名人芸的側面とのいずれもそぎ落とすことなく、ルーマンの緊張感を描き出していくこと。ルーマンの著作を「作品として読む」とはたぶん、そういうことだ。『意味の歴史社会学』は、こうした「作品的読解」を試みた初のルーマン研究であると言ってよいのではなかろうか。

もう一つ私が高橋の研究から受け取った示唆は、「ルーマンの読み方」というよりは「ルーマンの引き受け方」をめぐる倫理＝論理だ。仮に、「ルーマンの社会システム論は身につけた」といえるとしても、それをいかにして実定的な「知識社会学」へと結実させるかは論者次第といったところがないわけではない。たとえば、宮台真司氏のサブカルチャー研究(や一自己引用で恐縮なのだが一私自身がかつて展開した広告史)は、一応ルーマンに依拠してはいるが、ルーマンの歴

史記述とはまったく異なるスケールで「変動」を分析している。ポストモダンをモダンの範疇に含めるルーマンが、宮台氏のように数年のスパンでコード変容を語る論者を、自らの継承者として認めることはないように思う。ルーマンの理論を引き受けつつ歴史を描く実践とはどうあるべきなのだろうか……こうした茫漠とした不安を長いこと抱いていたのだが、『意味の歴史社会学』1章や補論2「カルチュラル・スタディーズとの接続の試み」を読みつつ、あらためて明示的な形で色々と考える機会を得ることができた。「変動の意味論」―「変動」の「摘出」をいかにして理論的に語るのか―とも呼ぶべき問題系について、高橋はきわめて示唆的な議論を展開している。

まず第一に、ルーマン的な歴史社会学の遂行者は、自らが「どのレベルで」変動を観察しているのか―たとえば、自らが語る「(全体社会内部における)ゼマンティック変動」が、「変異」「選択」「再安定化」のいずれの水準に位置するものなのか―を再帰的に問い続けなくてはならない。「[ルーマンは：引用者注]「どんなに旅支度を整えたとしても、歴史的意味論に向けたハイキングは、行程の半ばになってはじめて備えが十分であるかどうかははっきりするようたびになる」と述べて、歴史的意味論の旅行者に警告を発している(p43-44)」。おそらく、ルーマンの進化論・変動論は、歴史的分析の一般的枠組み(変化の理念型)を示すものというよりは、むしろ歴史記述という行為が持つ本質的な複雑さ、困難さを浮上させ、記述者の立ち位置 position をあぶり出す「索出的」な契機と考えるべきなのだ。「歴史の複雑性に対するルーマンのきわめて慎重な態度(p43)」を看過したまま、「ルーマン理論を応用した歴史社会学」に踏み出すことの危険性を、私たちは十分に自覚しなくてはならない。そうした《方法倫理の論理》を、『意味の歴史社会

学』は説得的に分節化している。

と同時に高橋は、ルーマンを越えてルーマンを領有する可能性を開いておくことも忘れてはいない。それが補論2として付されたシュテヘリ論である。そこでは、数百年における変動を扱うルーマンの枠組みと、より短いスパンに焦点を当てるカルチュラル・スタディーズ的な枠組みとの理論的折衝の可能性が模索され、両者の関連を問うスリリングな「歴史社会学」的課題が提示されている。数百年のスパンをとって展開されたフーコーの系譜学が、ほんの数単位の変化の記述に「応用」される、という事例を私たちは数多く目にしてはいるが、そこにおいて「スパン問題」が深刻な理論的アジェンダとして認知されているとは言い難い。フーコー本人が「変動理論」のようなものを徹底的に拒絶したわけだから、それは当然のことかもしれない。とすれば、「変動」「進化」理論にあくまで拘泥する（すべき）ルーマン派こそが、「スパン問題」に取り組まなくてはならない、ということにはならないだろうか。行為の同定問題の場合と同じように、「どこからどこまでを有意味な“変動”として摘出するか」という問題はけっして論者の恣意に任されてよいものではない。今後高橋が、こうした問題を理論的な水準で突き詰めてくれることを（外野から？）期待している。

### 【3】

通例ではそろそろ「内在的な批判」を提示すべき段なのであろうが、本書に教えられてばかりの私にはそうしたことはできない。最後にただ一点、非常に外在的な「質問」を投げかけてみたいと思う。

もちろん、「高橋はなぜ歴史を書かないのか」などとは問うまい。それは愚問だ。政治社会学者が政治家になる必要はないのだから。ただ、徹底的に応用困難なこのルーマンの歴史学を「今いったい誰が読む（べき）」と考えているのか、聞きてみたいと思う。「応用」を前提とした歴史記述は巷に溢れている。構築主義、物語論、メディア論、言説分析……。様々な歴史分析の「方法装置」が提出され、ほんの十年前に比しても「歴史社会学者」を名乗る若手は格段に増えている。方法なき実証史学の危機が皮肉にも歴史社会学の繁栄を支えているわけだ。こうした「総歴史社会学化」の趨勢のなかで、ルーマンの歴史—理論を読むことの意味、そのアクチュアリティを高橋はどのように考えるのか。フーコーは今や、「歴史的応用倫理学」のツールとなってしまった。ルーマンはどうか。ルーマンの指し手を楽しむと同時に、ギンズブルクの倫理に強く反応してしまう一人の「歴史社会学者」として、問うてみたいと思う。